

キャリア意思決定尺度の開発

— その1 : 大学生を対象とした探索的因子分析からの尺度構成 —

清水和秋・花井洋子

Development of the Career Decision Inventory:

(1) Exploratory Factor Analysis for University Students

Kazuaki SHIMIZU and Yoko HANAI

Abstract

Controversy arose around the issue of the dimensionality of the Career Decision Scale (CDS: Osipow, Carney & Barak, 1976). Related discussions and research are reported, and scales developed recently for measuring the multi-dimensions of career indecision are reviewed. To measure the career indecision of Japanese university students, forty two items were constructed for seven dimensions. The participants were 467 undergraduate students enrolled in the psychology program at Kansai University. Exploratory factor analysis of these items revealed the following six factors; choice anxiety and feeling awkward, conflict, moratorium, seeking counsel, evasion, and a sense of "barriers". To search the sub-dimensions of the first factor, exploratory factor analysis was used. These ten items were separated into two factors; choice anxiety and indecision. The high reliability of seven scales constructed from the results of these two factor analyses, is reported, and the methodological issues of the measurement of career indecision were discussed.

Key words: career indecision, exploratory factor analysis, dimensionality, scale, university students

抄 録

CDS (Osipow, Carney & Barak, 1976) の次元性について論争が起きた。これについての議論や実証研究に言及し、キャリア不決断の複数次元を測定するために最近開発された尺度をレビューした。日本の大学生のキャリア不決断を測定するために7つの次元について42項目が作成された。調査対象者は、関西大学の心理学専攻の467名である。これらの項目の探索的因子分析から次の6因子が得られた。すなわち、決定不安と自信不足、葛藤、モラトリアム、相談希求、逃避、そして、障害である。第1因子の下次元を求めて、探索的因子分析が使われた。これらの10個の項目が2つの因子に分かれた。すなわち、選択不安と不決断である。2つの因子分析結果から構成された7つの尺度信頼性が高いことを報告し、キャリア不決断の測定の方法論的問題を議論した。

キーワード：キャリア不決断、探索的因子分析、次元性、尺度、大学生

はじめに

キャリア関連行動の研究では、進路選択での心理的な面での困難さを操作的に取り扱う日本語の用語として、「未決定」と「不決断」が使われることがある。いずれも career indecision の訳語であるが、浦上（1995）あるいは川崎（1999）も指摘するように、併存して使われてきた。この訳語については、清水（1983）で、進路先を決めることができないという「状況にある」と進路を決めるという活動にコミットメントすることができないという「心理的状态あるいは傾向性」とを区別する意味で、前者を「未決定（undecided）」とし、後者を「不決断（indecision）」とした。そして、性格特性との関連を紹介する中で、「不決断」を状態不安に近いものとし、特性不安との関連で「優柔不断（indecisiveness）」についても、この分野の古典的な研究を紹介しながら、議論した。清水（1989a, 1989b）、清水・坂柳（1991）では、中学生を対象として、不決断を測定する尺度に検討を加えた。本稿では、最近のこの分野での研究動向について、不決断の次元性に関する論争とその後の発展を主に下位次元（あるいは下位尺度）を中心としてレビューをおこなう。そして、大学生を対象としたキャリア不決断について、新しく項目を作成し、その次元を探索してみることにする。

CDSの次元性論争

キャリア不決断を測定する代表的なアセスメントの道具の1つに Osipow, Carney & Barak（1976）による Career Decision Scale（以下、CDS）がある。将来のキャリアを決定することについて、その決定の困難さの訴えを16個の質問項目から測定しようとするものである。尺度名とは逆に、不決断（indecision）の傾向の強さをカウンセリング場面で捉えることを目的として開発された（Osipow, 1987）。

CDSの内部構造について、探索的な因子分析をCDSに適用したいくつかの研究では、その分析手順（因子数・共通性の推定の有無・因子軸の回転がVarimax法の直交解など）に混乱があり、統一的な因子の構造は得られていなかった。この混乱を解決することを目的として、Shimizu, Vondracek, Schulenberg & Hostetler（1988）では、先行するCDSを対象とする因子分析的研究を方法論の観点から批判的に検討を加え、探索的な因子分析を新しいデータに適用して、次の4因子を報告した。すなわち、Diffusion（進路選択についての全般的な不決断感）、Support（将来のキャリアについての相対的な決定にはあるがこの決定の支持を求める心理状態）、Approach-Approach（接近-接近葛藤感）そして External

Barriers（進路意思決定の内的・外的阻害感）である。Schulenberg, Shimizu, Vondracek & Hostetler（1988）では、引き続いて、この4因子を対象として、中学段階の3学年と高校段階の3学年からそれぞれ男子生徒と女子生徒を取り出して4つの群を構成し、CDSの4因子が、因子的に不変性であることを報告している。そして、Vondracek, Schulenberg, Hostetler & Shimizu（1990）では、一連の共同研究の最後として、4回の測定機会からの縦断的なデータで、4因子の変化を検討することで、不決断4因子の妥当性を明らかにしている。

この一連の共同研究が刺激となって、不決断の次元性をめぐって、議論が起きた。議論というよりは、CDSを1次元とみるか、多次元の構造を探る方向を求めようとするかという対立であった。ここでは、その展開を簡単に紹介してみることにする。

まず、Tinsley, Bowman & York（1989）は、複数の関連変数を同時に分析するとCDSが1つの次元に集約されると主張した。そして、因子分析によって下位次元を探すことを放棄して、単一次元に集約し、不決断の傾向をCDSの尺度得点の総点の上でアセスメントするという立場での論を展開した（Tinsley, 1992）。CDSの4因子間の相関は高く、探索的因子分析では.39～.58（Shimizu, et al., 1988, p.220）で、因子間相関も同値として拘束したモデルでは.58～.78（Schulenberg, et al., 1988, p.75）であった。Shimizuらの研究への批判の1つは、この因子間の高さにあったが、逆に言えば、因子間相関が高い変数群を直交に拘束したVarimax法による回転では適切な結果を得ることができなかった、ということでもある。Tinsleyらの研究でCDSが1次元にまとまったのは、他の変数と関連づけるとより内部相関の高い変数群が1つのものへと集約される解析方法論による現象とも考えられる。一連の共同研究でのわれわれの主張の論点は、測定尺度の下位次元としては、一次的に独立していること、すなわち、この次元がキャリア選択での心理的状态にそれぞれが独立して機能しているというものであった。そして、一連の研究で報告した4因子をベースにキャリア不決断研究が多次元モデルとして展開されることを期待していた。

H. E. A. Tinsleyによる議論を補強する研究が、フランス語版のCDSを対象とした研究で、Martin, Sabourin, Laplante & Coallier（1991）によって展開された。彼らはCDSの項目の分布が正規分布をしていないとして、構造方程式モデリングでの漸近的推定法によって解を推定し、1次元モデルにCDSを集約することができること、そして、このモデルへの適合度が4因子モデルよりも良いと主張して、Schulenberg et al.（1988）とShimizu et al.（1988）を批判した。

1994年のJournal of Career Assessmentにおいて、CDSの著者であるOsipow（1994）を

加えて、不決断の次元性に関する議論の機会を得た。そこで、Shimizu, Vondracek & Schulenberg (1994) では、解析方法論や尺度構成法の議論に加えて、多変量正規分布を前提としない方法論でも4因子の構造となることを解析して、Martin et al. (1991) に反論した。これに対して、Laplante, Coallier, Sabourin, & Martin (1994) は、4因子での下位尺度を構成することの可能性を否定し、CDSそのものへの疑問を提示した。Schulenberg, Vondracek & Shimizu (1994) での再反論の論旨は、不決断は多次元ではあるべきものであり、この次元性に関する議論は、CDSの分析を出発点としても、この尺度から得られる次元にだけ限定されるべきはない、というものであった。詳細は、ここでは省略する。

CDS以降の不決断関連尺度（海外）

CDS以降に開発されてきた不決断尺度（検査）を簡単に紹介してみることとする。下位次元（あるいは下位尺度）を、原典の用語のままではあるが、引用することで、この分野の最近の研究において明らかにされてきた下位次元の内容について、簡単に紹介してみることとする。

Chartrand, Robbins, Morrill & Boggs (1990) による Career Factors Inventory (CFI) は、Career Choice Anxiety (6項目) Generalized Indecisiveness (5項目)、Need for Career Information (6項目)、Need for Self-Knowledge (4項目) の4因子から構成されており、米国でのこの領域の研究としては、多次元アプローチの最初の尺度である。Simon & Tovar (2004) は、この4因子モデルを構造方程式モデリングにより検証したと報告している。

不決断の原因を測定することを目的として、Callanan & Greenhaus (1990, 1992) は、32項目からなる尺度を公開している。下位尺度は、Lack of self-information (9項目)、Lack of internal work information (4項目)、Lack of external work information (4項目)、Lack of self-confidence (3項目)、Decision-making fear and anxiety (4項目)、Nonwork demands (2項目)、そして Situational constraints (3項目) である。

Gati, Krausz & Osipow (1996) は、合計で44項目からなる Career Decision-making Difficulties Questionnaire (CDDQ) を提案している。この尺度の下位領域は、Lack of Readiness (Lack of motivation, Indecisiveness, Dysfunction Beliefs)、Lack of Information (About the Process, About the Self, About Occupation, About Additional Source) そして Inconsistent information (Unreliable Information, Internal Conflicts, External Conflicts) で

あり、次元間の関連性については、クラスター分析を適用してモデル化している。この尺度の中国語版をMau（2001）が作成し、因子構造について米国と台湾での標本とを対象として、潜在変数を「Lack of Readiness」だけとし、残りの2つは観測変数のままでCDSを説明しようとするパス解析をおこなっている。適合度は不十分なレベルと想像されるが、関連はあると報告している。

Sampson, Peterson, Lenz, Reardon & Saunders（1998）が発表したCareer Thoughts Inventory（CTI）は、3因子48項目からなる。すなわち、Decision-Making Confusion、Commitment AnxietyそしてExternal Conflictである。この尺度については、48項目の総点で取り扱われており、Saunders, Peterson, Sampson & Reardon（2000）では、CDSの総点と.78の相関があることを、そして、不安関係尺度とはCDSよりも相関が高いことを報告している。

Jones（1998）は、不決断とは逆の方向から3次元構造のCareer Decision Profile（CDP）を発表している。Decidedness（決定状態：2項目）、Comfort（決定の過程と現状に対する満足度の2項目）そしてReasons（下位にそれぞれ3項目からなる4尺度で構成：Self-clarity、Knowledge about occupation & training、Decisiveness、Career Choice importance）である。不決断を直接の目的とはしていないが、不決断傾向を逆方向から測るものであり、この尺度は不決断関係尺度の妥当性の分析で使用されることがある。

Germeijs & De Boeck（2002, 2003）は、性格傾向として優柔不断を測定する22項目からなる1次元のGeneral Indecisiveness尺度（GI）を作成して、キャリア不決断との関係を議論している。そして、3次元の17項目からなるCareer Indecision（CI）を公開している。3次元の名称とそれぞれの下位におかれている領域を簡単に紹介することにする。すなわち、Information Problems（Not knowing which alternative exist, Not knowing characteristics of alternatives, No link between alternative and objective）、Valuation Problems（Value unclarity, Value conflict, Evaluative evenness）そしてUncertainty about Outcome（Not knowing outcome, Not knowing whether enough prepared）である。これらの関係に関して、構造方程式モデリングで、GIがキャリア関連の不決断に影響を与えるというモデルを検討している。

Tak & Lee（2003）は、Korean Career Indecision Inventory（KCII）という5因子で35項目からなる尺度を発表している。この5因子は、Lack of Career Information、Lack of Self-Identity、Indecisiveness、Lack of Necessity RecognitionそしてExternal Barrierであり、因子の構造を構造方程式モデリングで検証している。

この他にも、特定の領域に焦点を当てた尺度としては、Career Barriers Inventory (Swanson & Tokar, 1991) や Career Decidedness (Lounsbury, Hutchens & Loveland, 2005) などがある。家族との間で進路決定に関して生起する葛藤を取り入れた尺度を Vidal-Brown & Thompson (2001) が Career Assessment Diagnostic Inventory (CADI) として発表している。この中には、Family Conflict、Emotional Independence、Decision-Making Anxiety、Identity Development、Career Informationそして Career Self-Efficacyの6領域で98項目が含まれている。

不決断下次元間の関連

不決断を目的として開発された尺度間の関係を探索的因子分析法で検討する際には、因子数の決定が決定的なキーの役割を果たす。因子数を少なくするとより高次の因子が得られることになり、極端な場合には1つの因子に集約されることになる。適切な因子数は、そして、測定内容のレベルとも深く関係してくることになる。

Kelly & Lee (2002) は、CDSにCFIとCDDQとを加えた81項目を分析している。回転が直交のVarimax解にとどまっている点には疑問はあるが、尺度間の関連性を考える上で興味深い8個の因子を報告しているので、簡単に紹介してみることにする。

1. Lack of information (情報の欠如)
2. Need for information (情報の要求)
3. Trait indecision (特性的不決断)
4. Disagreement with others (他の者との意見の不一致)
5. Identity diffusion (アイデンティティ拡散)
6. Choice anxiety (選択不安)
7. Positive choice conflict (肯定的選択葛藤)
8. Tentative decision (暫定的決定)

この8因子の中に3つの尺度の項目は次のように分かれた。CDSは5、8、7と(2と4)の各因子へ、CFIは2、3、6の各因子へ、そして、CDDQは、1、3、4、(7)の各因子へ、となった。なお、括弧は1項目のみである。この結果はCDSが1次元ではないことの傍証の1つでもあり、ここで得られた因子は、Shimizu et al. (1988) による4因子をカバーするものであった。この研究は、不決断の基本な次元を総括的に探求・検証する研究例であり、不決断の内部構造を追求する方向を示している。不決断の下次元間には、かなりの相関があることは、ここまでに紹介してきた研究からも明らかである。異なる

研究者が開発した尺度間に潜在する次元を探索するには、方法論を適切に適用しなければ、CDSの構造についての混乱した議論が再現しかねない。

不決断の次元を特定するには、外的変数との関係からその機能を明らかにする研究の展開が必要である。たとえば、Lounsbury, Hutchens & Loveland (2005) が、変数間の相関分析から Big Five の「誠実性」因子がキャリア決定性（不決断の逆に）関係していると報告しているように、パーソナリティ変数との関連も不決断の心理的な機能的を解明するためのもう 1 つの研究の方向である（Newman, Gray & Fuqua, 1999; Savickas, Briddick & Watkins, 2002; Wang, Jome, Haase & Bruch, 2006）。内的な構造に関する研究では、構造方程式モデリングによる不決断構造のモデル化の検討が必要と考えている。関連する概念あるいは変数との関係を、そのようなモデルに組み込むことによって、機能的な関連性を追求する方向が今後の研究として期待される。

不決断関連尺度（日本）

清水・坂柳（1988）で、CDSを日本語に翻訳した際に、キャリア選択への道も教育的介入のシステムも異なる日本へ、キャリア・カウンセリングが学校教育現場で機能している米国で作成されたものを尺度として使用することの限界を感じた。下山（1985, 1986）も日本独自の大学生の職業選択状況を考慮にいれて、不決断傾向の学生へのカウンセリングでの介入の道具の作成を目的として、CDSを参考にしながら41項目の職業未決定尺度を作成し、『未熟』、『混乱』、『猶予』、『模索』そして『安直』の5つの因子を報告している。下村・木村（1994）は、大学生を対象として、この尺度にクラスター分析を適用して「猶予混乱型」「決定型」「模索型」そして「安直未熟型」を分類し、就職活動の展開との関連を検討し、情報認識の程度と情報重視の程度とこれらの型との対応関係を議論している。

CDSでの翻訳の経験や下山の尺度を参考にしながら、清水（1989a）は、中学生を対象として、将来の進学と就職の2つの将来の進路課題を分けて設定し、それぞれについて、決定不安、選択葛藤、相談希求、障害不安、外的統制、情報不足、モラトリアム、そして、準備不安の8下位尺度で各5項目の40項目を作成している。男女生徒各300名を対象として、進学と就職についての合計で16尺度について探索的因子分析をおこない、『進路不安』、『教育的葛藤』、『職業的葛藤』、『相談希求』、『モラトリアム』そして『外的統制』の6因子を報告している。この因子の中で、『葛藤』が2つの課題に分かれただけで、他の因子では、進学と就職という2つの将来の発達課題に関係する不決断領域は、同一の因子に含まれることになった。『相談希求』が他の因子とは独立した傾向を示したが、この因子を除いた

因子間では.380～.562の中程度の正の相関が見られた。探索的因子分析に引き続いて、男女それぞれ300名を2つの集団として、多集団同時分析をCOSANで展開して、この6因子の不変性を検証している。さらに清水（1990）では、不変性のある因子パターン行列と因子間相関行列から斜交因子得点（清水，1981）を推定し、延長因子分析の方法で項目分析（辻岡・清水，1975）をおこない、6因子尺度を構成している。清水（1989b）や清水・坂柳（1991）では、教育的と職業的の2つの領域における不決断の変化の様相を縦断的に収集したデータから分析をおこない、不決断尺度の妥当性の報告している。

正社員としては就労していない求職意志のある若者を対象として、清水（1989a）の就職に関する課題の8下位尺度を調査した奥井・中里（2004）は、40項目の探索的因子分析から下位尺度として仮定した8尺度が単純構造の因子となることを報告している。彼らの研究においても因子間相関では、「相談希求」が他の因子との関連が低く、これを除くと.189～.572の正と値となっている。

浦上（1995）は、先行する不決断関連研究を参考して作成した40項目の探索的因子分析から、『情報・自信不足』、『希望関連不安』、『相談希求』、『葛藤』そして『モラトリアム』の5因子を報告し、尺度構成をおこなっている。そして、尺度の間の関連では、「モラトリアム」と「希望関連不安」や「相談希求」との相関がみられないこと、自己効力感と「情報・自信不足」とは-.519の負の相関関係にあり、「葛藤」と「モラトリアム」もそれぞれ-.223と-.253であることを報告している。彼は、この中で不決断と自己効力感との関連の可能性に言及しながら、「相談希求」については「不決断から脱却する積極的な面を示している（p.45）」としている。

川崎（2000）は、清水（1989a）をベースに、CD-ROM版職業ハンドブックの効果研究のために「自己理解不足」、「職業情報不足」、「就職情報不安」、「ガイダンス志向」そして「モラトリアム傾向」の5種類の尺度を、内的整合性の原理による項目分析から構成している。この他に、古市（1995）は、不決断という用語ではないが、関連する傾向を職業忌避的傾向尺度（10項目）として独自に発表している。

花井・清水（2006）では、清水（1989a、1990）の項目を中心として、下山（1986）、古市（1995）、浦上（1995）、奥井・大里（2004）の研究を参考にしながら、大学生の不決断傾向を測定するための47項目を作成した。大学生158名を対象として、探索的因子分析で、『情報・自信不足』、『障害不安』、『決定不安』、『葛藤』、『相談希求』、『逃避』そして『モラトリアム』の7因子を得ている。自己効力感に関しても60項目からなる尺度を構成して、「目標選択」、「計画立案」、「情報収集」そして「意思決定の主体度」の因子について、モ

デルを花井・清水・佐藤（2004）と同じように構成し、自己効力感と不決断との関係を構造方程式モデリングによって検討している。この研究でのデータ数は158名（男性43名、女性115名）であり、モデル構築のための観測変数をいくつかの小包から構成する際に、単純構造の観点から見ても不十分な点があった。このために、解釈も限定的なものとならざるを得ないが、ここでは、不決断と自己効力感との関連性を構造方程式モデリングでのモデル化の1つ例として、適合度が良いモデルの解釈を紹介してみることにする。

不決断と自己効力感との関係では、不決断から自己効力感への影響がみられた。まず、『情報・自信不足』から自己効力感の「目標選択」へ負の影響があり、進路決定の方法がわからないことが目標の選択をしにくくしていると考えられる。次に、『障害不安』から、「目標選択」へ低い正の影響、「情報収集」へ低い負の影響があり、予期せぬ障害や試験への不安が高いほど目標選択を強めるが、情報収集には消極的になる。自己効力感から不決断では、「計画立案」から『モラトリアム』へと、「情報収集」から『逃避』へは負に影響しており、計画をたてる自信がないと意思決定を先送りし、情報を集めることに消極的だと職業のことを真剣に考えなくなる。「目標選択」から『モラトリアム』に正の影響があることから、目標選択にこだわりすぎても、意思決定に消極的になり、不決断状態になってしまう可能性が読み取れる（花井・清水, 2006, p.1358 より）。すなわち、不決断傾向でも自己効力感に影響する次元があること、自己効力感の低さが不決断傾向としての『逃避』や『モラトリアム』を強めているようである。

今回の研究では、花井・清水（2006）で得た7因子をよりの確に測定することができるように、先行研究の成果を再度点検しながら、項目の表現などに検討を加えて、新しい版の42項目を作成し直してみることにした。尺度の名称にこれまでは『不決断』を使用してきたが、進路選択・決定に関係する領域を広く測定することを明示するために、『キャリア意思決定』を尺度の名称として、この次元性を再検討してみることにする。

方 法

調査対象者

2006年6月～7月に、関西大学社会学部の心理学関係科目の授業で調査を実施した。この調査では被験者のプライバシーと権利を保障するために、次のような趣旨の文書による契約を調査対象者と交わし、「調査参加承諾書」として調査対象者と調査者がそれぞれ保管している。

- A) この調査への参加は、自発的なものです。あなたには、質問への回答を拒否する自由があります。
- B) この調査結果は、調査者が責任をもって保管し、1)、2)そして3)以外の目的で使用することはありません。あなたの調査結果を個人が特定できる状態で公開することはありません。
- C) 調査結果のファイルや報告書(論文なども含む)にあなたの名前や個人的特徴を識別できるようなものを掲載することはありません。個人情報については、プライバシーを尊重し、関連法規を遵守いたします。

このB)の1)、2)そして3)は、授業の教材、授業での結果のフィードバック、そして心理学的研究活動のことを指している。今後とも継続的に調査することを明示して、生年月日と電話番号の一部にイニシャルを加えたコードの設定を求め、調査者が保管する「調査参加承諾書」と質問票にはこのコードの記載を求めた。このコードは、縦断調査データでの個人の照合コードとして使用する予定であり、参加者には個人の質問票の返還請求の際にも照合コードとなることを説明している。

調査での有効回答数は483名(1年男性65名、1年女性139名、2年男性66名、2年女性135名、3年男性18名、3年女性60名)であり、平均年齢(標準偏差)は、19.2歳(1.1)であった。なお、本稿では、分析対象変数に欠損値のあった回答を除外し、467名のデータ数で分析をおこなう。

調査変数

キャリア意思決定尺度では、先にも紹介した先行研究を参考にしながら、次のように、7領域を設定し、それぞれについて6つの質問項目を作成した。

「情報・自信不足」

1. 自分の興味や関心がよくわからないので、将来の職業が決まらない
2. 自分が、職業として、どのようなことをやりたいのかわからない
3. 自分の能力や適性がよくわからないので、将来の職業が決まらない
4. 自分に何が向いているかわからないので、職業を決められない
5. どのようにして職業を決めればよいか漠然としていてわからない
6. 進路先を決めるために必要な具体的な情報がないので、将来の職業が決められない

「決定不安」

1. 職業決定のことを考えると、不安を感じる
2. 就職先を決めることのむずかしさを考えると不安になる
3. 将来、職業を決めることがうまくいかどうか不安である
4. 将来の職業のことを考えると気が減入ってくる

5. 希望する職業への準備が十分であるかどうか不安である
6. 将来の職業を決めることに対して不安がある

「葛藤」

1. 魅力ある職業がいくつもあるので、将来の職業を決められない
2. 可能性のある将来の職業がたくさんあるので、どれにしたらよいかわからない
3. いろいろなことに興味があるので、どの職業を選んだらよいかわからない
4. いろいろ考えすぎて、自分に合う職業を決められない
5. 職業の選択肢がたくさんあるので、迷ってしまう
6. いろいろ考えすぎて、どの職業を選べばよいかわからない

「モラトリアム」

1. 職業のことなど考えずに、自分の好きなことに集中していたい
2. いつまでも仕事をしないで遊んで暮らせた方がいいのと思う
3. 将来、職業につかずに、好きなことをしていたい
4. 束縛されずに自由でいたいと思うので、定職には就きたくない
5. 就職しないでいつまでも今の状態でいられたらいいのと思う
6. 何もせずに、今のままでいたい

「相談希求」

1. 今まで重要な問題は親などと相談してきたので、職業選択の問題でも相談したい
2. 職業選択の問題は重要なことなので、誰かと相談したい
3. 将来の職業について、誰かと相談をしたい
4. 自分だけでは、職業は決定できない
5. 自分一人で何かを決めた経験が少ないので、将来の職業について、誰かと相談をしたい
6. 自分一人で何かを決めた経験が少ないので、誰かにアドバイスを求めたい

「逃避」

1. 将来の職業のことを真剣に考えたことがない
2. いままであまり職業のことをまじめに考えたことがない
3. 将来の職業については、考える意欲が全くわからない
4. 将来のことはわからないから、職業のことは考えたくない。
5. 自分が将来どうなるか分からないのだから、いま職業のことを考えても、意味がないと思う
6. 将来の職業のために積極的に努力するよりは、チャンスを待つほうがよい

「障害不安」

1. 具体的な将来の職業を考えているが、採用試験が心配である
2. 将来の職業についての希望は明確なのだが、採用試験に自信がない
3. 何かの影響で希望する職業につくことができなくなるのではないかと心配になる
4. 思わぬことで希望する職業につくことができなかもしれないと不安である
5. 希望する職業はあるのだが、これが最良なのかどうか不安である
6. 将来の職業について希望はあるが、周りが反対するのではないかと心配である

調査では、「どの程度あてはまると思えますか」という設定で、次の4件法で回答を求めている。すなわち、「4：そう思う、3：ややそう思う、2：あまりそう思わない、1：そう思わない」である。この他に、キャリア自己効力感、自尊感情尺度、Big Fiveについての質問項目版と形容詞短縮版なども同時に調査している。

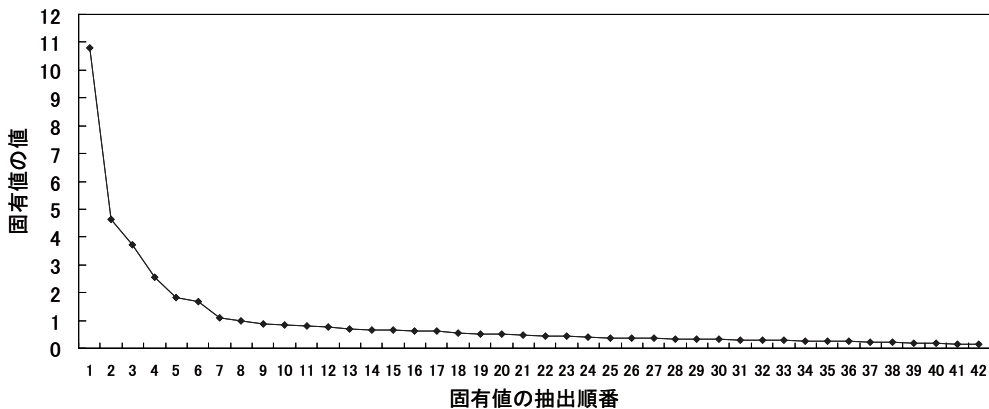


図1 キャリア不決断42項目のスクリーグラフ

結果

探索的因子分析

7領域でそれぞれ6項目の合計42項目に適切な因子数をスクリーグラフで検討した。上の図1に示したように、固有値の変化からは6因子が適切であると判断できた。主因子法の繰り返し法で共通性を推定したところ、6因子での因子寄与の総和は23.2となり、約55.3%を説明できることになった。この主因法による共通因子をSPSS ver.13でさらにPromax回転をおこなった。表1には、項目の平均・標準偏差も合わせて、探索的因子分析結果を示している。

キャリア意思決定尺度の開発 (清水・花井)

表1 意思決定尺度の探索的因子分析結果(因子パターン行列、因子間相関行列、共通性、平均・標準偏差、N=467)

記号* 不決断項目	I	II	III	IV	V	VI	共通性	平均	標準偏差
不安1 職業決定のことを考えると、不安を感じる	0.93	-0.08	0.01	-0.07	-0.13	0.34	0.66	3.25	0.79
不安2 就職先を決めることのむずかしさを考えると不安になる	0.89	-0.05	-0.10	-0.02	0.00	0.29	0.68	3.11	0.86
不安3 将来、職業を決めることがうまくいかどうか不安である	0.79	-0.01	-0.02	0.06	-0.08	0.20	0.59	3.34	0.78
不安6 将来の職業を決めることに対して不安がある	0.78	-0.04	0.09	0.02	-0.14	0.08	0.54	3.18	0.86
不安4 将来の職業のことを考えると気が滅入ってくる	0.76	-0.15	0.21	-0.08	0.01	0.12	0.53	2.54	0.96
不足2 自分が、職業として、どのようなことをやりたいのかわからない	0.55	0.06	-0.05	-0.03	0.18	-0.35	0.71	2.55	1.04
不足4 自分に何が向いているかわからないので、職業を決められない	0.52	0.21	-0.04	0.05	0.12	-0.23	0.72	2.62	0.97
不足3 自分の能力や適性がよくわからないので、将来の職業が決まらない	0.50	0.17	-0.09	0.09	0.15	-0.16	0.64	2.65	0.90
不足5 どのようにして職業を決めればよいか漠然としていてわからない	0.49	0.13	-0.02	0.05	0.18	-0.20	0.63	2.83	1.01
不足1 自分の興味や関心がよくわからないので、将来の職業が決まらない	0.42	0.13	-0.05	0.02	0.19	-0.31	0.60	2.55	1.02
葛藤1 魅力ある職業がいくつもあるので、将来の職業を決められない	-0.13	0.90	0.02	0.03	-0.07	0.14	0.67	2.48	0.87
葛藤5 職業の選択肢がたくさんあるので、迷ってしまう	0.04	0.86	-0.04	-0.02	-0.07	0.05	0.70	2.62	0.88
葛藤2 可能性のある将来の職業がたくさんあるので、どれにしたらよいかかわからない	-0.14	0.80	0.09	-0.06	-0.01	0.14	0.50	2.40	0.84
葛藤3 いろいろなことに興味があるので、どの職業を選んだらよいかかわからない	0.02	0.73	-0.01	-0.09	-0.08	0.05	0.48	2.61	0.91
葛藤6 いろいろ考えすぎて、どの職業を選ばよいかかわからない	0.30	0.57	0.03	0.02	-0.06	-0.05	0.59	2.63	0.94
葛藤4 いろいろ考えすぎて、自分に合う職業を決められない	0.39	0.50	0.07	0.04	-0.01	0.01	0.65	2.57	0.92
モラ5 就職しないですつまでも今の状態でいられたらいいのと思う	0.12	-0.04	0.84	0.08	-0.07	-0.07	0.75	2.22	1.11
モラ2 いつまでも仕事をしないで遊んで暮らせたらいいのと思う	0.09	-0.01	0.81	0.07	-0.11	-0.07	0.64	2.40	1.17
モラ1 職業のことなど考えずに、自分の好きなことに集中していたい	0.05	-0.01	0.73	-0.09	0.14	0.02	0.64	2.25	0.98
モラ3 将来、職業につかずに、好きなことをしていたい	-0.11	0.11	0.72	0.01	0.04	0.03	0.57	1.88	1.00
モラ6 何もせずに、今のままでいたい	0.22	-0.04	0.72	0.02	-0.05	-0.05	0.62	2.17	1.07
モラ4 束縛されずに自由でいたいと思うので、定職には就きたくない	-0.30	0.13	0.54	-0.04	0.24	0.03	0.45	1.52	0.78
相談3 将来の職業について、誰かと相談をしたい	0.07	-0.09	0.03	0.88	-0.26	-0.01	0.73	3.09	0.87
相談6 自分一人で何かを決めた経験が少ないので、誰かにアドバイスを求めたい	-0.09	0.03	-0.01	0.76	0.25	0.15	0.68	2.42	0.98
相談2 職業選択の問題は重要なことなので、誰かと相談したい	0.07	-0.03	-0.01	0.74	-0.34	-0.09	0.59	3.34	0.80
相談1 今までも重要な問題は親などと相談してきたので、職業選択の問題でも相談したい	-0.02	-0.02	0.06	0.71	-0.13	0.03	0.44	2.66	0.94
相談5 自分一人で何かを決めた経験が少ないので、将来の職業について、誰かと相談をしたい	-0.07	-0.03	-0.06	0.71	0.30	0.13	0.60	2.45	0.98
相談4 自分だけでは、職業は決定できない	0.01	0.01	0.03	0.56	0.14	-0.03	0.45	2.24	0.93
不足6 進路先を決めるために必要な具体的な情報がないので、将来の職業が決められない	0.16	0.21	-0.03	0.22	0.21	-0.05	0.40	2.36	0.86
逃避1 将来の職業のことを真剣に考えたことがない	0.00	-0.12	-0.02	0.05	0.79	-0.02	0.70	1.87	0.94
逃避2 いままであまり職業のことをまじめに考えたことがない	0.06	-0.13	-0.02	0.00	0.79	0.02	0.75	2.01	0.98
逃避3 将来の職業については、考える意欲が全くわかない	0.04	-0.12	0.04	-0.03	0.77	0.06	0.54	1.75	0.85
逃避5 自分が将来どうなるかわからないのだから、いま職業のことを考えても、意味がないと思う	-0.12	0.05	0.01	-0.17	0.65	0.06	0.32	1.57	0.72
逃避4 将来のことはわからないから、職業のことは考えたくない	0.27	-0.13	0.29	-0.03	0.44	0.00	0.55	1.91	0.88
逃避6 将来の職業のために積極的に努力するよりは、チャンスを待つほうがよい	-0.20	0.21	0.11	-0.02	0.40	0.17	0.18	1.81	0.64
障害2 将来の職業についての希望は明確なのだが、採用試験に自信がない	-0.14	0.03	0.01	0.00	0.06	0.70	0.51	2.45	0.97
障害3 何かの影響で希望する職業につくことができなくなるのではないかと心配になる	0.39	0.03	-0.05	-0.02	0.12	0.64	0.48	2.69	0.88
障害4 思わぬことで希望する職業につくことができなかもしれないと不安である	0.42	-0.07	-0.07	0.02	0.14	0.64	0.48	2.84	0.86
障害1 具体的な将来の職業を考えているが、採用試験が心配である	-0.07	0.05	0.04	0.07	-0.09	0.63	0.47	2.82	1.01
障害5 希望する職業はあるのだが、これが最良なのかどうか不安である	0.12	0.18	-0.04	0.00	-0.02	0.54	0.28	2.69	0.94
不安5 希望する職業への準備が十分であるかどうか不安である	0.40	0.08	-0.03	0.02	-0.09	0.47	0.33	3.05	0.82
障害6 将来の職業について希望はあるが、周りが反対するのではないかと心配である	-0.09	0.17	0.01	0.14	0.23	0.34	0.20	1.75	0.80
第I因子 決定不安と情報・自信不足	1.00	0.51	0.22	0.62	0.54	-0.21			
第II因子 葛藤	0.51	1.00	0.07	0.42	0.33	-0.29			
第III因子 モラトリアム	0.22	0.07	1.00	0.04	0.40	0.02			
第IV因子 相談希求	0.62	0.42	0.04	1.00	0.30	0.00			
第V因子 逃避	0.54	0.33	0.40	0.30	1.00	-0.40			
第VI因子 障害	-0.21	-0.29	0.02	0.00	-0.40	1.00			

注:項目には、領域名と項目番号を付けた。領域名の長いものは、「情報・自信不足」を「不足」、「モラトリアム」を「モラ」として表記した。

キャリア不決断の領域を7つ設定したが、因子としては、次の6因子となった。すなわち、第I因子『決定不安と情報・自信不足』、第II因子『葛藤』因子、第III因子『モラトリアム』、第IV因子『相談希求』、第V因子『逃避』、そして、第VI因子『障害』である。第I因子には、2つの領域のそれぞれ5項目が1つにまとまった。項目作成段階では、「情報・自信不足」領域と想定していた第6番目の項目で「進路先を決めるために必要な具体的な情報」とした部分が曖昧な反応を引き出したようである。表1ではこの項目は『相談希求』の因子の最後に配置させている。「不安」領域の5番目の項目は「希望する職業への準備が十分であるのか」という表現が関係したようで、『障害』の因子に入った。「障害」領域の6番目の項目が、この『障害』の因子でやや低い因子パターンの値である。一般的には、各因子ともそれぞれの領域において設定した項目が単純構造を示すという結果を得たといえる。

第I因子（10項目）の探索的因子分析

「不安」と「情報・自信不足」の2つの領域から構成された第I因子の因子パターンを見ると、「不安」の5項目の値が高く、質的な違いあるように見受けられる。そこで、この10項目だけを対象にして、探索的因子分析を適用してみることにした。固有値の値で大きいものから順に4つを示すと、5.58、1.51、.54、.48となり、明らかに2因子構造であると判断できる。そこで、因子数を2として主因子法の繰り返しにより共通性を推定し、Promax法で因子パターンを求めた。この結果が表2である。

表2 第I因子の10項目だけを対象とした因子分析結果

記号*	不決断項目	不安	不決断	共通性
不安1	職業決定のことを考えると、不安を感じる	0.92	-0.15	0.70
不安2	就職先を決めることのむずかしさを考えると不安になる	0.79	0.04	0.66
不安3	将来、職業を決めることがうまくいくかどうか不安である	0.76	0.05	0.62
不安6	将来の職業を決めることに対して不安がある	0.67	0.11	0.54
不安4	将来の職業のことを考えると気が滅入ってくる	0.62	0.09	0.46
不足2	自分が、職業として、どのようなことをやりたいのかわからない	-0.07	0.89	0.72
不足1	自分の興味や関心がよくわからないので、将来の職業が決まらない	-0.09	0.85	0.64
不足4	自分に何が向いているかわからないので、職業を決められない	0.07	0.82	0.75
不足3	自分の能力や適性がよくわからないので、将来の職業が決まらない	0.07	0.79	0.69
不足5	どのようにして職業を決めればよいか漠然としていてわからない	0.13	0.70	0.61

注：記号は表1と同じである。因子間相関は0.61であった。

表1の第I因子の因子パターンの値と比較すると、表2の「不安」領域の5項目の値は、よく似ている。全体の因子分析と同じ『不安』因子を得ることができたと解釈することが

できる。これに対して、「情報・自信不足」領域の5項目は、相関が0.61で独立した別の因子となった。2つの表の因子パターンの値を見ても、明らかな違いが見られる。結果として、独立した探索的因子分析から、この領域の項目の情報をより適切な形で取り出すことができた。

表2の「情報・自信不足」領域では、第6番目の「進路先を決めるために必要な具体的な情報がないので、将来の職業が決められない」が明確にどの因子とも関係を示さなかったため分析から除外している。このために領域を想定した際の意味内容とは質的に異なったものとなってきている。「わからない」や「決まらない」という方向の項目であるので、ここでは、尺度全体の下位領域としての『不決断』因子とする。

全体項目の探索的因子分析の際に、7因子の可能性を探ってみている。その際に7番目となった因子は、「障害」の6番目の項目だけからなる特殊因子で、「不安」と「情報・自信不足」の2つの領域は分離されず、第7番目の因子を除くと、6因子の構造は、表1に近いものになった。今回のデータでは、全体で分析すると、2つの領域が1つにまとまった6因子構造といわざるを得ない。

構成した尺度の信頼性と統計量

因子分析の結果から7つの尺度を再構築して、信頼性の下限である λ_3 （Guttman, 1945）を、SPSSで推定してみることにする。なお、この信頼性係数の推定値は α 係数（Cronbach, 1951）とも呼ばれてきた。

表3 構成した尺度の統計量と信頼性の推定値

	平均値	標準偏差	『不安』	『不決断』	『葛藤』	『モラトリアム』	『相談希求』	『逃避』	『障害』	信頼性係数
『不安』	3.08	0.69	1.00	0.58	0.38	0.27	0.51	0.34	0.33	0.91
『不決断』	2.64	0.85	0.58	1.00	0.56	0.23	0.44	0.52	-0.17	0.87
『葛藤』	2.55	0.70	0.38	0.56	1.00	0.14	0.36	0.19	0.04	0.87
『モラトリアム』	2.07	0.81	0.27	0.23	0.14	1.00	0.09	0.47	0.04	0.88
『相談希求』	2.70	0.70	0.51	0.44	0.36	0.09	1.00	0.20	0.24	0.86
『逃避』	1.82	0.61	0.34	0.52	0.19	0.47	0.20	1.00	-0.11	0.82
『障害』	2.76	0.61	0.33	-0.17	0.04	0.04	0.24	-0.11	1.00	0.75

注：尺度の項目数『不安』と『不決断』は5個で、他は6項目としている。項目得点の総和を項目数で割ったものをこの尺度得点としている。

各因子についての尺度の構成は次のように進めた。まず、仮定した領域の6項目からの因子が得られた『葛藤』、『モラトリアム』そして『逃避』では、該当する6項目から尺度を構成した。『相談希求』も、同じように尺度採点をした。表1では「不足」の項目を配

置させているが、これは便宜的な表示に過ぎない。『障害』では、因子パターンの高い順に0.4までとして、「不安」の5番目の項目を含めて、6項目から尺度を採点した。『不安』と『不決断』については表2の結果からそれぞれ5項目で尺度を構成してみた。

信頼性係数の推定値は、『障害』が.75であったが、他は.8台で、『不安』は.91という5項目にもかかわらず非常に高い値となった。表3に示したように、推定値は、尺度としての信頼性の下限としてみると項目数が少ないにもかかわらず高い値となったといえる。

因子分析結果から構成した尺度の性質を、因子分析での因子間相関から検討してみることにする。まず、『不安』と『不決断』の因子間相関は表2に注記したように.61であった。構成した尺度間の相関も.58であり、高い信頼性係数ともあわせて、因子空間とほぼ同じ様な関係を尺度間でも確保できているといえる。表1の第I因子を2つに分割しているので、この因子と他の因子との関係は簡単には比較できないが、『不決断』のほうが表1の因子間相関に近い値を示している。

尺度間の相関で傾向が大きく異なったのは『障害』であった。信頼性係数の値も低く、この因子の項目は第I因子にも関係するものが多く、構成した尺度の方向が因子軸の方向から離れたのではないかと推測される。ここでの尺度構成では、「不安」の5番目の項目を、因子パターンの値が、0.4を越えているので入れたわけであるが、この項目は第I因子で.40の値を示しており、尺度の方向性を第I因子の方向へ傾けたようである。これに替えて「障害」の6番目の項目を入れると第I因子との関係は弱くなるが、この項目の共通性は低く、第VI因子の因子パターンも低いので、この項目を尺度に含めるには不適切であると、今回のデータの分析結果としては、判断している。

考 察

探索的因子分析から次元を追求する方法は、斜交解の因子パターン行列から尺度を構成する方法と共に、心理学研究で最も広く使用されている。潜在する構造を尺度として再現することは、対象となる研究領域の性質との関係で発生するいくつかの未解決の問題によって、困難に遭遇することになる。不決断に関する研究の混乱は、この典型的な例ではないかと考えている。ここでは、いくつかのポイントを置いて、問題の所在に考察を加えてみたい。

不決断の次元性

清水（1983）でも紹介したように、不決断の測定は、キャリア・カウンセリング場面で

の1つの質問からはじまった。たとえば、Holland & Holland（1977）は「暫定的な職業選択をしているか、あるいは、現在フルタイム雇用されているか」という質問に「はい」とは答えなかった者を不決断者と診断した。不決断のレベルをはかる総合的な指標としてCDSを作成して不決断研究の道を開いたS. H. Osipowは、I. GatiによるCDDQの開発に参加するまで、CDSは1次元の尺度として取り扱うことにこだわっていたようである。Osipow（1999）は、J. L. Hollandをこの研究分野の第1世代の研究者とし、自らの尺度を第2世代に位置づけている。CDS以降に発表されたCFI、CDDQのような多次元的な構造の不決断尺度を第3世代と呼び、キャリア選択場面にある者が抱える問題の詳細を診断して、カウンセリングをその必要に合わせて展開することを提案している。

本稿で紹介してきたように、この分野の欧米での研究は多様な展開を見せ始めている。Kelly & Lee（2002）の研究が明らかにしているように、独立に開発された尺度の間に共通性と独自性が存在するようであるが、統合された第4世代の次元はまだのようである。わが国での不決断尺度構成の試みは、欧米とは別な道を歩んできている。『逃避』や『モラトリアム』は、文化的に独自性の強い因子である。海外で提案されている次元との共通性の検討などいくつかの課題が残っている。

質問項目の作成

この研究分野での方法論は、次元性を探索的因子分析で明らかにし、因子の不変性を構造方程式モデリングで進める、というところへきている。本稿でもその1部を紹介してきたように、このような方法論を適用した多くの研究は、十分に適合度の良い結果を報告していないことがおおい。その理由の1つが、質問項目の構成にあるのではないかと考えている。1つの項目が複文から構成されていたCDSを手がかりとして研究が展開されてきたからだけではない。キャリア選択場面に関連してくる条件や状況が複雑であるために、項目はどうしても複雑なものとなりやすい。このことが内部に潜在する次元をデータ解析の世界では見えにくくしているようである。

構造方程式モデリングでのモデル化では、項目よりも、いくつかの項目を集めた下位尺度（あるいは小包）のほうが、構成概念に適切なモデルを適合度の高いレベルで推定する測定モデルの観測変数としては適している（清水・山本, 2007）。キャリア自己効力感のモデル化で、花井・佐藤・清水（2004）、花井・清水（2005, 2006）、清水・花井（2004）などが、観測変数を項目ではなく、小包化することによって適合度の高い結果を報告している。

キャリアでの意思決定は、生涯にわたる発達課題である。発達段階によって、その課題の様相は変わってくる。発達段階の異なる者には、それぞれの発達段階に適切な質問を提示する必要がある。社会的・文化的文脈の違いもここに入ってくる。このために適切な標本を対象として測定次元の不変性を検証する方策が、この分野では、特に重要なものとなることも指摘しておきたい。

対象者（標本）

本研究では大学生を対象として、現在の社会的状況を加味しながら、項目作成をおこなっている。特定の集団をイメージして項目を作成する方が、置かれている状況との関係で、より適切に不決断傾向を測定することができるように思われるが、この方向は、特殊性を強めることになる。たとえば、関西大学の学生のキャリア選択場面で提供されている資源を項目の表現の中に入れると、これにアクセスすることのできない者は、答えることができなくなるからである。今回の42項目を作成する際には、大学で生活する者だけではなく、若年労働者の世代をより広くカバーできるように、項目を作成している。

構成した尺度の平均（表3）を反応カテゴリーの中間値と比較してみると『不安』傾向が強く、『障害』を感じ、相談を求めている、という姿が読み取れる。『逃避』傾向も弱く、『モラトリアム』への反応も低いようである。今回の分析では心理学専攻生を対象としている。このような反応傾向が大学生の一般的な傾向かどうかは、因子の不変性ともあわせて、より広い標本での検討が今後の研究課題の1つである。

個人間差から個人内変化の測定へ

キャリアの学習活動の成果としてある種の蓄積が直線的に進行する発達現象であれば、清水（1999）で紹介したように、知能の生涯発達研究分野を中心として展開されてきた構造方程式モデリングによるモデル化と解析が有効である。川崎（2000）も指摘するように、不決断状態と決断状態とをある意味では上下に行き来する心理的な変動であり、この測定は、それほど単純なものではない。

横断的な研究では、起きている変化の様相を明らかにすることはできない。清水・坂柳（1991）のように縦断的なデータからの知見が必須である。意思決定はプロセスとして進行するものであり、この過程は極めて個人的なものである。個人内で起きている変化は、個性記述的な立場から批判されるように、集約的な統計量の中で平均値に埋没してしまう。一方で個別性の強い変数では、測定の信頼性も保証されないことになる。変化を前提とす

る測定では、変数は変化に敏感なものでなければならない。変化するという事は、集合的統計量の立場からは信頼に乏しい、扱いにくいものということになる。伝統的な不決断の測定は、横断的な研究にとどまるものが多く、データ収集のデザインを縦断へと転換する必要がある。

解析方法論も清水（1999）でも紹介している潜在成長曲線モデルでは、あくまでも平均的な変動の様相のモデル化であって、個別的に変動する変化をモデル化することは難しい。新しい理論的転換が必要なようである。そこで、ヒントとなるのが、Nesselroede, Gerstorf, Hardy & Ram（2006）の提案ではないだろうか。因子分析の世界では一人の被験者を対象として測定を100回以上繰り返し、このデータから個人内の変化を捉える方法はP-技法と呼ばれてきた。この方法を構造方程式モデリングで展開したダイナミック因子分析法を、複数の被験者からのデータに適用して、因子的な不変性と個性記述的な変化の情報を解析することを、彼らは、気分の変化を材料として検討している。キャリア不決断も、状況との関係の中で、日々刻々と変化すると考えるべきであり、繰り返しになるが、この変化は極めて個性性の高いものである。変化に何が影響するのかを特定する方法を、キャリア不決断の研究では、個人レベルで検討することが必要であると考えている。

尺度の妥当性の検証

関連する変数を取り込みながら、キャリア発達やキャリアの意思決定へ効果的に介入するためには、変数間の因果的な関係性を特定化していく研究も必要である（たとえば、清水・花井, 2004; 花井・清水, 2006）。不決断のメカニズムの解明に向けて、パーソナリティ諸変数もこのようなモデル化の範疇に入ってきている。研究の成果をキャリア・カウンセリングの展開に資するものとするためにも、変数間の関係性をモデル化する研究の蓄積が必要と考えている。このようなキャリア関連行動分野では、因果的なメカニズムに、対象者の発達段階が鋭敏に影響することを指摘しておきたい。

本稿では、探索的因子分析と尺度構成の可能性を検討するに留めている。考察で述べてきたように、不決断の測定の質を議論するには、Vondracek, et al.（1990）や清水・坂柳（1991）などの経験を踏まえて、縦断的なデータでなければならないと考えている。現在、縦断データを集積中であるので、別の機会にこの解析を踏まえて、今回報告した尺度の妥当性の検討をおこないたい。

注記：本論文は日本キャリア教育学会第28回研究大会（2006年11月12日、関西大学）で清水・花井・山本（2006）として発表したものを再分析し、加筆したものである。データの入力と管理では、関西大

学大学院社会学研究科博士課程前期課程の山本理恵さんからの援助を得ている。コメントを頂いた方々や大学院「計量心理学ゼミ」に参加している皆さんにも感謝を申し上げる。

引用文献

- Callanan, G. A., & Greenhaus, J. H. (1990). The career indecision of managers and professionals: Development of a scale and test of a model. *Journal of Vocational Behavior*, 37, 79-103.
- Callanan, G. A., & Greenhaus, J. H. (1992). The career indecision of managers and professionals: An examination of multiple subtypes. *Journal of Vocational Behavior*, 41, 212-231.
- Chartrand, J. M., Robbins, S. B., Morrill, W. H., & Boggs, K. (1990). Development and validation of the Career Factors Inventory. *Journal of Counseling Psychology*, 37, 491-501.
- Cronbach, L. J. (1951). Coefficient Alpha and the internal structure of tests. *Psychometrika*, 16, 297-334.
- 古市裕一 (1995) 青年の職業忌避的傾向とその関連要因についての検討 進路指導研究, 16, 16-22.
- Gati, I., Krausz, M., & Osipow, S. H. (1996). A taxonomy of difficulties in career decision making. *Journal of Counseling Psychology*, 43, 510-526.
- Germeijs, V., & De Boeck, P. (2002). A measurement scale for indecisiveness and its relationship to career indecision and other type of indecision. *European Journal of Psychological Assessment*, 18, 113-122.
- Germeijs, V., & De Boeck, P. (2003). Career indecision: Three factors form decision theory. *Journal of Vocational Behavior*, 62, 11-25.
- Guttman, L. (1945). A basis for analyzing test-retest reliability. *Psychometrika*, 10, 255-282.
- Holland, J. L., & Holland, J. E. (1977). Vocational indecision: More evidence and speculation. *Journal of Counseling Psychology*, 24, 404-444.
- 花井洋子・佐藤未来・清水和秋 (2004) 進路選択に対する自己効力感尺度の構造— (2) SEMによる潜在変数のモデル化— 日本心理学会第68回大会発表論文集, 1198.
- 花井洋子・清水和秋 (2005) 進路選択に対する自己効力感と対人恐怖心性の因果モデル— 2つの尺度の統合的モデル化の試み— 日本心理学会第69回大会発表論文集, 1347.
- 花井洋子・清水和秋 (2006) 進路選択における不決断・効力感尺度—SEMによるモデル化— 日本心理学会第70回大会発表論文集, 1358.
- Jones, L. K. (1998). The Career Decision Profile: Using a measure of career decision status in counseling. *Journal of Career Assessment*, 6, 209-230.
- 川崎友嗣 (1999) 職業情報の検索によるキャリア自己決定効力・キャリア不決断の変化—職業ハンドブックCD-ROM検索システムの効果測定— 悠峰職業科学研究所紀要, 7, 12-21.
- 川崎友嗣 (2000) 大学生のキャリア決定自己効力とキャリア不決断に及ぼす職業情報の効果 (その1) 関西大学社会学部紀要, 31 (2・3), 197-240.
- Kelly, K. R., & Lee, W. C. (2002). Mapping the domain of career decision problems. *Journal of Vocational Behavior*, 61, 302-326.
- Laplante, B., Coallier, J.C., Sabourin, S., & Martin, F. (1994). Dimensionality of the Career Decision Scale: Methodological, cross-cultural and clinical issues. *Journal of Career Assessment*, 2, 19-28.
- Lounsbury, J. W., Hutchens, T., & Loveland, J. M. (2005). An investigation of big five Personality traits and career decidedness among early and middle adolescents. *Journal of Career Assessment*, 13, 25-39.
- Martin, F., Sabourin, S., Laplante, B., & Coallier, J. C. (1991). Diffusion, support, approach, and external barriers as distinct theoretical dimensions of the Career Decision Scale: Disconfirming evidence?

- Journal of Vocational Behavior*, 38, 187-197.
- Mau, W-H. (2001). Assessing career decision-making difficulties: A cross-cultural study. *Journal of Career Assessment*, 9, 353-364.
- Newman, J. L., Gray, E. A., & Fuqua, D. R. (1999). The relation of career indecision to personality dimensions of the California Psychological Inventory. *Journal of Vocational Behavior*, 54, 174-187.
- Nesselroade, J. R., Gerstorf, D., Hardy, S. A., & Ram, N. (2006, unpublished manuscript). *P-technique factor as idiographic filters for psychological constructs*. The University of Virginia.
- Osipow, S. H. (1987). *Career Decision Scale manual*. Odessa, FL: Psychological Assessment Resources.
- Osipow, S. H. (1994). The Career Decision Scale: How good dose it have to be? *Journal of Career Assessment*, 2, 15-18.
- Osipow, S. H. (1999). Assessing career indecision. *Journal of Vocational Behavior*, 55, 147-154.
- Osipow, S. H., Carney, C. G., & Barak, A. (1976). A scale of educational-vocational undecidedness: A typological approach. *Journal of Vocational Behavior*, 9, 233-243.
- 奥井秀樹・中里大助 (2004) 若年労働者の職業的不決断の測定 進路指導研究, 22 (2), 19-25.
- Sampson, J., Peterson, G., Lenz, J., Readdon, R., & Saunders, D. (1998). The design and use of dysfunctional career thoughts among adults, college students, and high school students: The Career Thoughts Inventory. *Journal of Career Assessment*, 6, 115-134.
- Saunders, D. E., Peterson, G. W., Sampson, J.P., Jr., & Reardon, R. C. (2000). Relation of depression and dysfunctional career thinking to career indecision. *Journal of Vocational Behavior*, 56, 288-298.
- Savickas, M. L., Briddick, W. C., & Watkins, C. E., Jr. (2002). The Relation of Career Maturity to Personality Type and Social Adjustment. *Journal of Career Assessment*, 10, 24-49.
- Schulenberg, J. E., Shimizu, K., Vondracek, F. W., & Hostetler, M. (1988). Factor invariance of career indecision dimensions across junior high and high school males and females. *Journal of Vocational Behavior*, 33, 63-81.
- Schulenberg, J., Vondracek, F. W., & Shimizu, K. (1994). Convergence and obfuscation: A rejoinder to Osipow and to Laplante, Coallier, Sabourin, and Martin. *Journal of Career Assessment*, 2, 29-39.
- 清水和秋 (1981) 因子間相関を固定した斜交因子得点. 関西大学社会学部紀要, 12 (2), 113-128.
- 清水和秋 (1983) 職業的意思決定と不決断 関西大学社会学部紀要, 14, 203-222.
- 清水和秋 (1989a) 中学生を対象とした進路不決断尺度の因子的不変性について—COSANを使用して— 関西大学社会学部紀要, 21 (1), 143-176.
- 清水和秋 (1989b) 中学生の進路展望と進路不決断との関係 進路指導研究, 10, 1-7.
- 清水和秋 (1990) 進路不決断尺度の構成—中学生について— 関西大学社会学部紀要, 22 (1), 63-81.
- 清水和秋 (1999) キャリア発達の構造的解析モデルに関する比較研究 進路指導研究, 19 (2), 1-12.
- 清水和秋・花井洋子 (2004) 進路自己効力感の因子の構造 日本進路指導学会近畿・中国四国地区部会第5回研究会.
- 清水和秋・花井洋子・山本理恵 (2006) キャリア不決断尺度の開発—大学生を対象とした探索的因子分析— 日本キャリア教育学会第28回研究大会発表論文集, 92-93.
- 清水和秋・坂柳恒夫 (1988) 進路不決断と進路成熟—父親、母親、友人、教師の影響に関する高校生の横断的な研究— 進路指導研究, 9, 28-36.
- 清水和秋・坂柳恒夫 (1991) 進路選択の変化と進路不決断—中学生男子生徒3年間の横断調査の分散分析— 進路指導研究, 12, 1-10.
- Shimizu, K., Vondracek, F. W., Schulenberg, J. E., & Hostetler, M. (1988). The factor structure of the Career

- Decision Scale: Similarities across selected studies. *Journal of Vocational Behavior*, 32, 213-225.
- Shimizu, K., Vondracek, F. W., & Schulenberg, J. (1994). Unidimensionality versus multidimensionality of the Career Decision Scale: A critique of Martin, Sabourin, Laplante, and Coallier. *Journal of Career Assessment*, 2, 1-14.
- 清水和秋・山本理恵 (2007) 小包化した変数によるパーソナリティ構成概念間の関係性のモデル化—Big Five・不安 (STAI)・気分 (POMS) — 関西大学社会学部紀要, 38 (3), 61-96.
- 下村英雄・木村 周 (1994) 大学生の就職活動における就職関連情報と職業未決定 進路指導研究, 15, 11-19.
- 下山晴彦 (1985) 来談者の職業未決定について—一個人面接の観点から— 東京大学学生相談所紀要, 4, 21-30.
- 下山晴彦 (1986) 大学生の職業未決定の研究 教育心理学研究, 34, 20-30.
- Simon, M. A., & Tovar, E. (2004). Confirmatory factor analysis of the Career Factor Inventory on community college sample. *Journal of Career Assessment*, 12, 255-269.
- Swanson, J. L., & Tokar, D. M. (1991). Development and initial validation of the Career Barriers Inventory. *Journal of Vocational Behavior*, 39, 344-361.
- Tak, J., & Lee, K-H. (2003). Development of the Korean career indecision inventory. *Journal of Career Assessment*, 11, 328-345.
- Tinsley, H. E. A. (1992). Career decision-making and career indecision. *Journal of Vocational Behavior*, 41, 209-211.
- Tinsley, H. E. A., Bowman, S. L., & York, D.C. (1989). CDS, MVS, Vocational Rating Scale, and Decision Rating Scale: Do they measure the same things? *Journal of Counseling Psychology*, 36, 115-120.
- 辻岡美延・清水和秋 (1975) 項目分析における項目統計量と構成尺度の統計量—因子的真实性係数と因子的妥当性. 関西大学社会学部紀要, 7 (1), 107-120.
- 浦上昌則 (1995) 女子短期大学生の進路選択に対する自己効力感と職業不決断 進路指導研究, 16, 40-45.
- Vidal-Brown, S. A., & Thompson, B. (2001). The career Assessment diagnostic inventory: A new career indecision assessment tool. *Journal of Career Assessment*, 9, 185-196.
- Vondracek, F.W., Schulenberg, J.E., Hostetler, M., & Shimizu, K. (1990). Dimensions of career indecision. *Journal of Counseling Psychology*, 37, 98-106.
- Wang, N., Jome, L. M., Haase, R. F., & Bruch, M. A. (2006). The Role of Personality and Career Decision-Making Self-Efficacy in the Career Choice Commitment of College Students. *Journal of Career Assessment*, 14, 312-332.

—2006.12.25受稿—